

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 202号

2019年2月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より (2)

第2講 贖いの無限の深さ

(昭和 51(1976)年 6月 27日説教)

第1の点 動詞の態

私がこの7, 8年に少しく福音に学びましたその信仰の度合いとい
たしまして、ロマ書10章9節から13節までの『聖書』の文句の意
味につきまして、大体6つの点について申し上げたい。…

第1は、9節と10節との動詞の態が違うということです。…

すなわち、9節と10節の「信ずる」という字、「口で告白する」、こ
の二つの動詞の態が違う。9節の方は能動態、アクティブでありま
すが、10節の方は受け身、受動態であります。

ことさらにパウロは9節と10節において動詞の態を変えた。10
節は受け身にした。すなわち、われわれは、イエス・キリストを主

であると告白すると言い、また神がイエスをよみがえらせた、すなわち贖いを成就したということを信ずる。この「信ずる」という字、イエスを主なりと告白するというこの動詞が、9 節ではアクティブ(能動態)になっておりますのに、10 節では受け身になっている。…

これは、最近いよいよ私ははっきりしてきたのですが、われわれはイエスの贖いを信ずるという「贖い」というのがわれわれの信仰の客体になっておりますけれども、客体でなくして、これは主体でありまして、その贖いがわれわれに現われてくるのです。われわれを教え、われわれを導いて、われわれに信仰を告白させ、イエスの贖いを信じさせるのです。

ですから「我々は告白せしめられ」、「我々は信じせしめられて」と訳する方が正しいと思います。私は、将来この 10 節の訳は受け身の訳となって、日本文にも現われる日があると信じます。

第 2 称名が、救いの条件となっている

第 2 は、イエスは主なりと告白するという称名が、救いの条件をなしていることでもあります。すなわち、我々はロマ書第 3 章の終わりにおいても、信仰によって義とされる、「信仰だけで」となっております。ルターは、「信仰だけ」という字を入れたくらいに「信仰だけで義とされる」、救いに入る。これは、「信仰だけ」と私は思っていました。しかし、この 10 章をよく読んでみますと、心で贖いを信じることと、口で「イエスは主なり」「わが主イエスよ」と告白すること、この二つで救いは完成すると書いてある。

そうですから、信じていただけでは救いは成就しない。口で「わが主イエスよ」と言わなければ救いは成就しない。すなわち、救いの条件としてイエスの名を呼ぶことをパウロが要求していることに気が付いた。これは 1968 年、私が満 70 歳の時に気が付いた。

第3 「告白する」という動詞の位置

第3の点は、この9節、10節は、原文では一文をなしておりまして、イエスはわが主なりと主の名を「告白する」という動詞が、この文の最初に出てきている。最後にまた「告白する」という字が出てきている。そうですから、パウロがいかにかこの「主の名を呼ぶ」ということを強調しているか。信ずるということよりも、主の名を呼ぶことの方に重点を置いている。

これは驚くべき事であります。パウロ先生は、信ずることよりも、「イエスはわが主なり」と称えることを重要視している。そういうことを、私はこの文章をたびたび読むことによって発見いたしました。

この第3の点は驚くべきことでありまして、われわれは「信ずる」「信ずる」と言って、信ずるだけで救われると今まで教わってきたのです。ところがここにパウロは、9節、10節の one sentence（一つの文章）において、信仰よりも、主の名を呼ぶことの方を重要視している。これは将来学者が注目する日が必ず来ると私は確信する。

第4 「告白する」という字の意味

第4の点は、イエスは主なりと「告白する」という動詞と、これは9節、10節に出てきますが、12節、13節になりますと、「呼び求める」「呼び求める者」となっております。「告白する」という動詞と、「呼び求める」という字は、よく読んでみると字の意味が違う意。これも私は最近気が付きました。

「告白する」という字は、言語でも、ドイツ語でも、英語に訳している字でも、ただ口で言うだけではないのです。「告白する」という字の意味は、同意するとか、それを認める、**agree**、**acknowledge** という意味があるのです。そうですから、口で告白するためには、イエスが主であることを認める、あるいは、同意することが元になっている。それがあって、「イエスは主なり」と口で告白している。そういう字なのです。

12 節「主を呼ぶ」、13 節「主の名を呼ぶ」

第 4 の点は、イエスは主なりと「告白する」という動詞、これは 9 節、10 節に出てきますが、12 節、13 節になりますと、「呼び求める」「呼び求める者」となっております。「告白する」という動詞と、「呼び求める」という字は、よく読んでみますと字の意味が違う。これも私は最近気が付きました。

「告白する」という字は、原語でも、ドイツ語でも、英語に訳している字でも、ただ口で言うだけではないのです。「告白する」という字の意味は、同意するとか、それを認める、agree、acknowledge という意味があるのです。そうですから、口で告白するためには、イエスが主であることを認める、あるいは、同意することが元になっている。それがあって、「イエスは主なり」と口で告白している。そういう字なのです。…

「主の名を呼ぶ」という方は、特に 12 節では「主を呼ぶ」となっていますが、13 節では、「主の名を呼ぶ」となっている。そうですから、呼ぶのに、「名を呼ぶ」というのが一番簡単なのです。13 節で明らかに説明していますが、主の名を呼ぶとなれば、「イエスさま」「イエスさま」と簡単にイエスの名を呼んだらいいのです。これが 13 節

です。

そうですから、この 9 節、10 節では「告白する」、すなわち告白するからには「イエスは主なり」と同意し、「イエスは主なり」と認めるということが条件となっておりますが、12 節、13 節ではそれを条件としていない。ただ、口で動かしたらいいのです。「わが主イエスよ」と口で言ったらいい。

わたしはこの差違、これはパウロがことさらに口で言う 9 節・10 節のときと、12 節・13 節のときに口で言う言い表しているのを変えたということは、非常な深い、広い意味があると信ずる。非常に簡単にした。パウロは誰でもいける、誰でもどんな時でもいける方法にしたのです。

第5 ユダヤ人とギリシア人との区別はない

第5番目は、12節、私は9節から13節までのうちで最も好きな節は第12節。これは私に最も魅力がある。ここには「ユダヤ人とギリシア人との区別はない。イエスの名を呼ぶ人に無限の富が主の名を呼ぶ人に向かっている」と書いてある。ここには贖いという字は消えてしまっています。ここではもう、イエスが復活したと信ずるとか、そういうことは消えているでしょう。

そしてここには、ユダヤ人とギリシア人との区別はないと書いてある。この字に注意してください。ユダヤ人とギリシア人の区別がないということは、白と黒との区別がないということだ。万人に対して、イエス・キリストの贖いの無限の深さが、名を呼ぶ者に向かっているというのです。イエスの名を呼ぶすべての人に贖いの無限の深さが向かっている。これは条件にあらずして、その無限の愛の深さを吸い取る麦わらみたいなものなのです。牛乳を吸うのに何か道具が要るでしょう。その神の無限の贖いの富を吸い取るのにパウロは、称名という口を、パウロは説明したのです。

浄土宗とキリスト教

私は浄土宗の家に生まれました。私は、浄土宗に非常に尊敬を持っておりませんが、今まで浄土宗とキリスト教はよく似ているなと思っていました。この頃は、その二つの救いがぴたっと一つに見えだした。「阿波之介という一文不知の陰陽師が申す念仏と、源空が申す念仏と変わりなし」と法然が言った。

私芳之助と阿波之介はよく似ている。そうですから、法然上人が、芳之助と一文不知の陰陽師が申している称名と、私が申している称名は変わりがないと源空・法然上人がおっしゃっているような気がする。パウロは、「無尽蔵の贖いの富」と、エペソ書3章8節に言いました。贖いの無限の深さなのです。

11 節と 12 節（信と行）

第 6 番目に感じますことは、11 節と 12 節です。11 節は、彼を信ずる者は失望に終わることなく救われるということでしょう。彼を信ずる者は救われるということです。この 12 節は、彼の名を呼ぶ者に、称名する者に救いの富が無限にある。11 節は信を言い、12 節は行を言っている。この信の方をあまり難しく言ってはいかん。

ここで、高円寺の駅に行くのはどの道ですかと聞いたら、「そこへ出て、その角を右に曲がって、それから電車道に沿ってずっと左へ行ったら、高円寺駅へ行くのです。それを、「土地で道を聞いたら、こう行けと人が教えてくれた。私はそれを信じて、歩いて行って着きました」なんて言う人はいないでしょう。信ずるということを難しくいったらいかん。そう言うとおりにしたら信じたことになる。そうでしょう。言われたとおりに道を歩いて、電車道に沿ってずっと行けば、教えてもらった言葉を信じたことになる。そうでしょう。言われたとおりにその道を歩いて、電車道に沿ってずっと行けば、教えてもらった言葉を信じたことになるでしょう。言った人の言葉を信ずるんだ、信ずるんだと言って、この点でみんなが引っ掛かっているのです。

行だけ言いたまえ。行だけ。私は『歎異抄』を読みまして、「親鸞に起きてはただ念仏して助けられまいらすべしと、よき人の仰せを被ぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」と最初に書いてあります。あの書き方で、最後に「信ずる」とあるけれども、私だったら信ずるとは書かない。私だったら、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人の教えを被ぶりて、念仏するよりほかに子細はない」と、私は信ずると言わないで、念仏すると言います。…

信ずるというのを客観的に言う場合は、道を教えてくれた人の言葉を信じて行っただと客観的に言う場合は「信ずる」という字は要るけれども、主観的に言えば、信ずるということはない。言ったとおりにしたらいいのです。主の名を呼んでいたら救われると『聖書』に書いてあるのだから、主の名を呼んだらよろしい。理屈は要らん。

『ロマ書略記』と『ロマ書略記別冊』の違い

『ロマ書略記』(昭和 48 年 3 月)と『ロマ書略記別冊』(昭和 51 年 5 月)を比較しまして、区別を二つほど申し上げます。

『略記』の初めのところ、1 章 17 節の後半の文をルターは「義人は彼の信仰によって生くべし」と訳した。内村先生は、「信仰による義人は、信仰によって生きる」とお訳しになった。私は「信仰による義人は称名によって生かされる」と受け身に読む。「称名によって生かされる」という理由は、「称名は信仰よりも易いから」と私は説明しました。

しかし今度の『別冊』の最後のところに「再びロマ書 1 章 17 節後半について」と書きまして、私は、略記の初めに書いた「称名は信仰よりも易いから」という理由を改めまして、ロマ書 1 章 9, 10 節において、「称名ということが救いの条件となっている」としました。もう一つは、称名ということが 10 節、11 節において、信仰よりも強調されている。この二つの理由によって、内村鑑三先生は、「信仰によって生くるべし」とお訳しになったが、私は「称名によって生かされるべし」と訳した。そういうふうに私は改めました。どうぞその点を二つ、よく見てください。

私の目の前の義務

以上 9 節から 13 節までについて述べました 6 つの点は、世界的に有名な注解書、ICC のヘッドラム、サンデー両先生、あるいはまた、NTD のアルトハウス大先生、又内村鑑三先生も、私のこの 6 点については、9 節から 13 節までの注解では述べていらっしやらない。…

私は、こういうふうなお話ができますのは、この 7, 8 年、目の前に来る自分の義務を、不十分ではありますが、それをなそうと務めてきただけなのです。…そのおかげで、こういう話ができるようになったのです。

諸君も、目の前に置かれた義務をどうぞお尽くしになりまして、そして、主の名を呼びつつ目の前の義務をなさいまして、そして、私は、高円寺東教会、杉並区高円寺南 5 丁目の 23 の 10 番地におきまして、主の名を呼びつつ、目の前の義務をなしつつ、そしてここで少しでもこの場所に輝くように神様からして頂きたい。

伝教大師が、一隅を照らす、これすなわち国宝、日本の国の宝だよとお教えになりましたが、私もこの一隅、日本の高円寺の一隅を少しでも照らす者となることができまして、伝教大師の遺風を学ぶものとなりたい。